

連載

親子保健・学校保健(8)

「電話でつながる子どもの居場所～チャイルドライン～
日本における10年のあゆみと今後の課題」特定非営利活動法人チャイルドライン支援センター理事 中澤 恵子
特定非営利活動法人めぐろチャイルドライン副代表

1. はじめに

チャイルドラインは、行政でも企業でもない市民の運営する、18歳までの子どもだけを対象とした電話です。

チャイルドラインでは電話「相談」という言葉を使いません。そのため、子どもは特に相談ごとがなくても、電話をかけてくる事が出来ます。大人の価値観で話をしたり評価したりせず、あくまでかけてくる子どもの気持ちに寄り添い、解決を急がず、子どもの気持ちを受け止めることを基本に、どんなことでも一緒に考えていく姿勢で、電話に向かいます。

子ども自身が相談できる、いわゆる「相談機関」は、児童相談所や子ども家庭支援センターなど、数多く用意されていますが、子ども自身の相談が多いとは言えません。チャイルドラインには、年間10万件を超える電話がかかってくるのですが、チャイルドラインが民間の活動であることも、電話のかけやすさ、話しやすさに繋がっているのかもしれない。

また、チャイルドラインは単に電話で子どもの話を聴くだけでなく、電話を媒体として子どもたちに心の居場所を提供し、その自立を支えると同時に、子どもの権利が守られ、子どもが安全に安心して幸せに育つ社会作りを目指して、各地の実施団体が、地域に根ざした活動を行っています。

チャイルドラインが、これまでに聴き重ねてきた、電話の中からみえてくる子どもの現状、大人との関係性、社会の有り様などを社会に発信し、そこから、子どもも大人も共に育ち合える豊かな地域作りへの、模索を重ねています。

本稿では、日本におけるチャイルドラインのこれまでの活動の経緯と、電話の内容について紹介し、チャイルドラインが大切にしている「聴く」ということの役割、および、チャイルドラインの活動の意義と課題について述べたいと思います。

2. 日本のチャイルドラインのあゆみ

チャイルドラインという名称の子どものための電話は、1986年、イギリスに誕生しました。

1990年代後半、日本では、学校でのいじめの問題が顕在化し、大人がその対応に追われていました。

そのような中で、1997年、東京都内の市民団体の一つが、チャイルドラインの日本での実施を検討するため、イギリスのチャイルドラインを訪問しました。また、当時の文部省は、イギリス・チャイルドラインの生みの親である、ジョン・ホール氏とリサ・バレット氏を招いて、国際シンポジウムを開催しています。さらに、同年、国会では、超党派による「チャイルドライン設立推進議員連盟」(現：チャイルドライン支援議員連盟)が作られています。

そして、1998年に、その市民団体によって、日本で初めての「チャイルドライン」が始まりました。

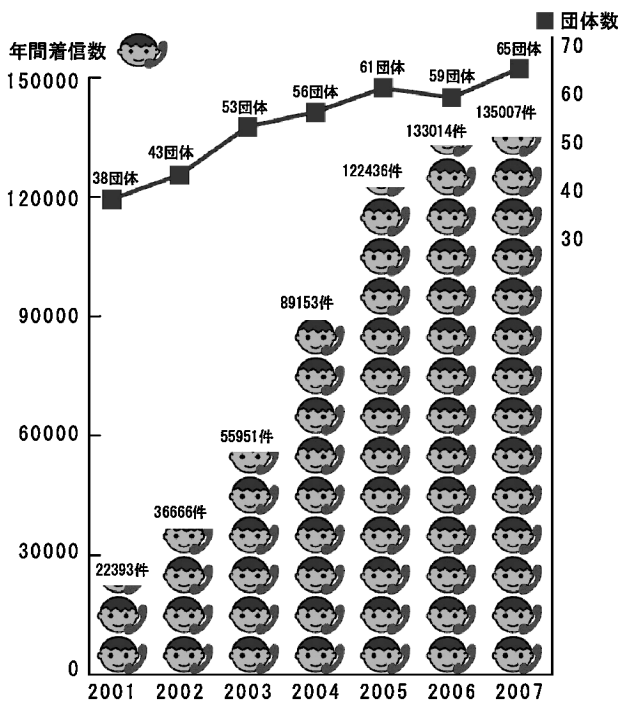
その後、日本各地で、自分たちの地域にもチャイルドラインを開設しようという動きが高まり、子ども支援に関わる多くの市民団体が、次々とこの活動を始めていきました。

1999年、チャイルドラインの開設支援、及び、実施団体のネットワーク作りなどを目的として、チャイルドライン支援センターが設立され、2001年に、特定非営利活動法人として認可されました。

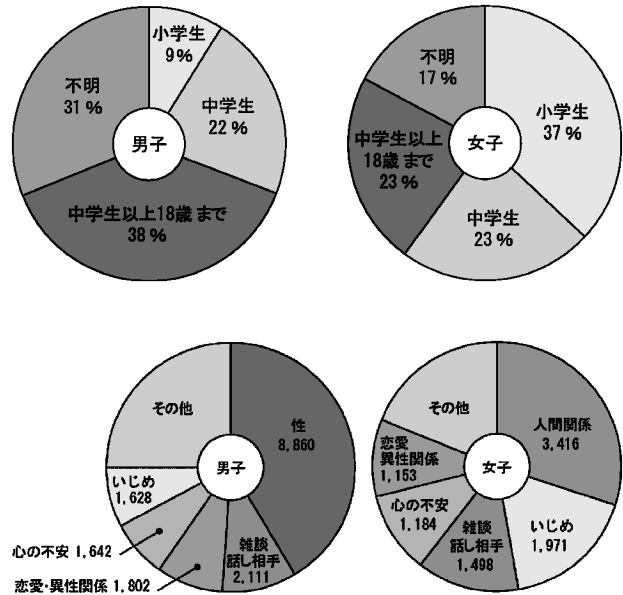
そして、近年の子どもを取り巻く厳しい状況を反映して、各地でこの活動がひろがり、文部科学省、厚生労働省、総務省をはじめ、行政機関や多くの団体や企業からの支援、協力を得て、2008年6月現在では、全国で65のNPOなどの民間団体がこの電話を運営しています。

また、文部科学省が平成16年にまとめた、児童生徒の問題行動対策重点プログラムの最終まとめ(http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/16/10/04100501/001.htm)の中で、第三者相談機関として、チャイルドラインがとりあげられ、現在では、文部科学省のホームページのいじめ相談窓口(http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/)

年間着信数と団体数推移
(2001~2007年度)



かけてくる子どもの年齢構成 (2007年度)



0000006112210.htm)でも、チャイルドラインが紹介されています。

2008年11月からは、全国どこからでも、日曜を除く毎日、統一番号のフリーダイヤルで、電話がかけられる体制がスタートしました。

3. どんな電話がかかってくるのか

全国の子どもからチャイルドラインにかかってくる電話は、2007年度は、1年間で13万5千本を越え、累積で79万6千本に達しました。

これまでの着信件数と電話を受ける団体数の推移を、棒グラフと折れ線グラフに、2007年度に電話をかけてきた、子どもの男女別年齢別の割合、および、男女別の電話内容の上位5項目を、円グラフに示しました。

現在の日本で、これだけの数の子どもの生の声が集まるシステムは、チャイルドライン以外にはありません。ただ「聴く」だけの電話に、どうして、このようにたくさんの子どもが、電話をかけてくるのでしょうか？

電話は匿名性があり、イヤだと思ったらいつでも、子どもの方から電話を切ることができます。大人は意識するしないに関わらず、その価値観を押し付けたり、社会通念で子どもの話を聞こうとしがちですが、そうなると、その電話はたちまちブツッと切れてしまいます。電話というメディアは、言わ

ば、子どもと大人の力関係を平等にすることができるメディアです。そこでは、子どもは安心してその現実を吐露し、本音で自分を語ってくれます。

子どもは電話と言うメディアを通して、多くのことを表現してきます。言葉を使って「話す」というだけでなく、「話さない」すなわち「無言」や「息遣い」や「笑い声・泣き声」、「歌う」、「叫ぶ」といった、様々な表現方法が使われます。

13万5千本の電話のうち、実際に子どもと会話ができたものは36%にすぎません。「問い合わせ・お礼」が1%あり、あとの63%は「すぐ切れたものや無言」(44%)や「一言や意味不明、お試し・いたずら」(19%)と言う、いわゆる会話にはならないようなものです。

子どもの表現は「話す」というよりも、そうした、むしろ言葉を使わない場合の方が多いとも言えます。

「ばーーか！」のような一言、「ギャハハハハハ」のように笑い声だけ、あるいは泣き声だけ、そうかと思うと、(深刻な話がしばらく続いた後…)「そんなことあるわけねーじゃないか、アホ!!」などというものなど、子どもの表現は実に多様です。

子どもの様々な表現の中から、子どもたちの現実がみえてきます。

4. チャイルドラインにみる子どもたちの今

チャイルドラインが、これまでに受けた電話から垣間見える、子どもたちの姿を、いくつかご紹介しましょう。

1) 子どもたちの友人関係

子どもからの電話の中で、仲良く遊んだ話や喧嘩

や仲直りの話など、友人関係の話題は数多く登場します。少し勇気を出して、お互いに話してみたり相談してみたら、と思うような話も少なくありませんが、そうは簡単にいかないのが今の子どもの世界ようです。

「友達と喧嘩した。謝りたい」

「困ったことが起きたんです。僕、借りていないのに、〇〇君が貸したゲーム返せと言うんです。どうしたらいいですか？」

「水泳教室で私だけ進級テストに受かった。うまくなりたいけど、私だけ、どんどん進級して、友だちにいやな思いさせたり、違うクラスになって、会えなくなったら困るなあ」

「友だちが、すぐ、△△してよと命令してくる。いやなんだけれど断れない。もう我慢の限界」

「他の子とちょっと仲良くしたら、元の友だちに無視されて、結局一人ぼっち。一人で弁当食べている。寂しい」

2) 充実した毎日って…?

学校に行っても、家にいても、そこに居場所がみつけれない子どもからの電話も、たくさん入ります。

「学校に行って、友だちと話したことがない。俺って、〈透明高校生〉かな」

「最近、いい事なくて、どうしたらいいかな。今、中1で小学校から友だちがいない。親は妹とは仲が良いけれど、自分には『勉強しろ』とか『友だちと遊んでいないんだね』としか言わない。ずっと部屋にいて、何をすればいいかわからない」

「勉強も部活も、そこそこにしているが夢中になれない。結果がでないと手応えがない。こんなこと友達に話しても、相手にしてもらえない。モヤモヤした学校生活から抜け出せない」

3) 終わることのない「いじめ」

2007年秋には、いじめが原因とされる自殺が相次ぎ、連日マスコミでも取り上げられましたが、最近では、他に注目を浴びるような事件が多いせいか、その報道も少なくなりました。しかし、電話の中に見る限り、子どもの世界でいじめが終わることはないようです。

大人は忙しいし、どうせわかってくれないという諦め、いじめをするとスツとするという子どもの心、いじめる側といじめられる側が、いとも簡単に入れ替わってしまう集団の構造…子どもの世界には、いじめの存在が必然であるかのような印象を受けることさえあります。

「いじめられている。親には心配するから言えない。先生は気にするなと言うだけ、だからいつも一人で

泣く。本当は悲しいのに人前では笑ってます」

「いじめてた子が転校した、何か気が抜けたみたいで寂しい」。

「友だちに誘われて、レイプした。あんまり悪いことしたって気はしない。なぜって、レイプに付き合わない、仲間はずれになって、いじめられる心配があるからやったレイプだもんね」

「突然、理由もなくクラス中から無視されるようになった」

「いじめのこと、先生に相談したら、『私のクラスにも、この学校にも、いじめなんかありません』と言って叱られた」

「いじめを親や先生に相談したくない。親は気にするなと言うだけだし、先生に話しても何も変わらない。学校に行くのをやめるか転校するしかない」

「いじめたくないのに、いじめちゃいけないってわかってるのに、気がつく、いじめてしまっているんです。なぜだかわからない」

「いじめは悪いことだと思うけど、いじめると何だかスツとする」

4) 電話で語られる虐待

電話の中で、虐待が直接的に訴えられることは多くはありません。チャイルドラインで語られる虐待には、主に2つの場合があります。1つは、虐待を受けた時から何年も時が経過しているものです。

「小1のころ、叔母さんにひどい虐待を受けたことが忘れられない。チャイルドラインに話せば、忘れられるかな」

「父から、ひどい暴力を受けていた。僕の方が身体が大きくなったから、今はないけれど、自分の気持ちに、どうやって向き合ったらいいかわからない」

「小学校のころに、担任の教師から首を絞められた恐怖が、今も、突然フラッシュバックしてくる」

そして、もう1つは、本人がその事態を、少しも虐待だとは認識していない場合です。

「お父さんは勉強のことばかり言う。お腹が痛くて学校休みたいたと言ったら、仮病だって言って殴られて、学校に行かされた。仮病なんてひどい」

「父はお酒を飲むと母を殴る。そして、僕は母に叩かれる。それでも僕は両親が好き。僕はどうしたらいい？」

「私は左利きで、なかなか治りません。お母さんは食事中でも、みっともないと言って、私を外に出して怒ります。お父さんは治せと言って、私を叩きます。」

5) 楽しいことや嬉しいことも分かち合う相手がいない

悲しいことや辛いことばかりでなく、楽しいこと

や嬉しいことも、格好つけてると言われるから、妬まれるから人には言えないと、子どもたちは言います。いったい、子どもたちは、誰と気持ちを分かち合うのでしょうか？

「中学まで片道2時間かかります。バスに乗って、電車に乗って、またバス。超!! 疲れるけれど、学校はメッチャ楽しい」

「郵便受けまで郵便物を取りに行き、洗濯物たたみを手伝ったら、お母さんがすごく喜んでびっくりしたよ。うれしかった」

「今日ね、野球の試合でホームラン打ったよ。ヤッタゼって感じ」

「うれしい！ 聞いて！ 母の日のポスターコンクールに入賞したよ」

6) 子どもたちの恋と性の実態

チャイルドラインには、子どもたちの恋の話も沢山入りますが、友人関係の調整に不得手な子どもたちは、ここでも、なかなかうまく話が進められないようです。

「好きな子に好きと言いたいのですが、どんなふうに言えばいいですか？」

「好きってコクったのだけれど、その後どうすればいいですか？」

「以前は何でも気軽に話ができたのに、彼女に好きって言ったとたん、急に僕を無視するようになった。これって、振られたっていうのかなあ」

また、思春期にもなれば、性への関心や興味が高まるのは、当然のことですが、性教育の欠如と、巷に溢れる性産業からの情報で、子どもたちの性の現実も、混乱を極めていと言わざるを得ません。

「コミックに書かれているみたいにセックスするにはどうしたらいい？」

「男と女は付き合ったらセックスしなきゃ異常ですか？ 彼女はセックスしないのはおかしいと言うけれど…」

「中絶は殺人ですか？ 法には触れないのですか？」

「女の子になりたいわけじゃないけれど、女の人の服装をしたい」

「月経が怖い、気持ちが悪い、なくなればいい」

「生理がないのだけれど、妊娠したのかなあ。親に言ったら殺される」

「月経って何ですか。小学校では習わなかった」

「コンドームはどうやって買うんですか？」

「自慰の回数が多いと病気になりますか？」

「包茎について教えてください」

7) 子どもを巻き込む大人社会

もちろん、子どもは大人の社会と無縁でいるわけではありません。離婚や格差社会、急速にすすむ

IT化、戦争や飢餓など不安に溢れている世界、子どもたちは否応なく、そこに巻き込まれていきます。

「お父さんとお母さんが離婚する、私はどうすればいい？ 私はもうダメな子になるの？」

「両親が離婚して、弟と私は父と暮らしている、母に会いたいけれど、父がダメだと言う母は元気なんだろうか」

「日本は格差社会になるんだって、僕なんかどうせ負け組だよ」

「お父さんが病気になって、母がパートに出て、兄は高校をやめた。僕は絵の学校に行きたいと思っていたのだけれど、お金がかかるし、もう絵は描けなくなるのかな…」

「メル友掲示板で知り合った人から『これはいくらみても無料よ』と言われたので安心してたら、17万3,000円の請求書がきた。払わないと裁判になるってメールもきた。親には言えない。どうすればいい？」

「世の中、殺人ばかりで怖い。夜、親と一緒にいても何回も鍵をみに行ってしまう」

「戦争はいやなんです。平和を守るためには何をすればいいのですか？」

8) 大人はどこにいったのか

少子化で子どもの数は減り、子ども一人あたりの大人の数は増えているはずなのに、子どもの回りには、まるで大人がいないかのようです。果たして、大人は、いったい、どこに行ってしまったのでしょうか。

「おばあちゃんの家泊まって楽しかった。おばあちゃんって年寄りだよ」

「今日の抜き打ちテスト、すごく上手にいったよ。うれしくて電話した」

「小さい弟の面倒見は私の仕事なの。すぐ泣くし、言うこと聞かないし、大変なの」

「お母さんの仕事の終わりが遅いから、まだ夕食、食べていない。自分で作ろうかな」

「こんにちは…(しばらく無言)…ちょっと暇だったから電話してみました。今、私、小3なんだ……」

「明日が天気ならいいんだけど…一緒に祈ってよ」

子どもの周りにいるのは、条件つきでしか子どもを認められない、大人のように。親にさえ、条件つきでしか受け入れられていない、子どもからの電話がかかってきます。

「テスト満点、でも親には言えない。言うよ、『今後ますます頑張るように』なんて恐ろしいこと言われる」

「高校受験に失敗した。何が辛かって、『小学校から塾に通わせたのにこの程度か』ってお金がらみで言われたこと」

「いじめられて学校休んだら、父に『サボりは出ていけ、みたくもない』と言われた。もう家出するか死ぬしかない」

5. 聴くことの方

チャイルドラインでは、「聞く」ではなく「聴く」を使い、「事柄で聞かない、心を聴く」という言い方を、よくします。ここでは、その「聴く」ということについて考えてみたいと思います。

1) 子どもが電話で表現するもの

子どもが、チャイルドラインで「自分を語る」という事の中には、率直に自分の気持ちを伝えたいということ、自分の気持ちに気づいたり、気持ちを整理したりすること、そして、傷ついた自分を癒すこと、このような3つの要素があります。

(1) だれかに話したい、聴いて欲しい

子どもたちは日常の中で、様々な事柄に出会います。そして、その出会いにワクワクしたりドキドキします。喜びや楽しさや嬉しさを感じる時も、恐怖や怒りや悲しさや寂しさを感じる時もあります。

子どもは、聴いてくれる大人がいれば、こんなことがあったよ、あんなことがあったよ、と出来事を話してきますが、その出来事を体験した時の「エェッ!!」とか「ホッ…」とか「うわー」という、言葉にならない心の動きを含めて、色々な気持ちを、表現したい、だれかに伝えたいということではないでしょうか。そして、伝えたことがだれかにしっかりと受け止められる時、子どもの中で楽しい気持ちは2倍になり、幸せは膨らんでいきます。いやな気持ちは消化されて、心が軽くなります。

ムカつくことも、超うれしかったことも、その気持ちは、だれかに受け止められて、初めて命を与えられます。

受け止められずに消化されなかった気持ちは、消化不良のように胃にもたれ^{より}のように子どもの心の奥底に溜まっていきます。

(2) 自分を発見し、気持ちを整理する

大人も同様ですが、話すことで自分の本当の気持ちに気づいたり、気持ちが整理されたりすることはよくあることです。

リレーの選手になりたくなかったので、わざと遅く走ったら、仕事を休んで運動会を見に来た母親に「仕事休んだのに、なんでリレーの選手にならなかったのか」と聞かれ、悲しくなって電話口で泣いていた小学校の子は、ゆっくり話を聴いていくと、やがて気持ちが整理できたのか、「うん、大丈夫、電話してよかった」と、本人の中で納得した様子で電話を終えました。

高校生からの「野外露出から抜け出せない」という電話を、拒否せず距離をとりながら聴いて行くと、やがて話は生き方の問題に発展していき、「抜け出せないの」は野外露出ではなく、モヤモヤした学校生活だったということがわかってきます。

初めて年上の人を好きになった男の子は、話しくそうにしながらも、勉強が手につかない困惑や、きちんと話がしたいという自分の気持ちを、少しずつ丁寧に語ってくれました。そして、やがて「来週、彼女に話しに行きます」と、自分で方向性をみつけていきました。

このように、自分の気持ちを整理していく時には、自分が語った気持ちをきちんと受け止め、それをまた返してくれる相手が必要です。語る、受け止める、相手に返す、そのキャッチボールがあって、初めて可能になります。そして、この人ならちゃんと受け止めてくれる、という信頼感を感じた時、初めて子どもは語り出します。

(3) 語ることから癒しが始まる

くり返されるいじめの中で生きる価値を見つけられず、自殺したいと言ってきた子どもに、「そんなことはない、君は生きる価値がある」と何度言っても、堂々巡りになります。生きる価値があるののかないのかということではなく、自殺したいほどの怒りや辛さを、生きる価値がないと思わなければ、やっていけないほどの苦しみや悲しみを、自分の中では抱え切れない感情を、誰かに受け止めて欲しいということではないのかと思うのです。

苦しみや悲しみは言葉にするのは辛いものですから、なかなか表現できるものではありません。しかし、表現することで、その感情を捨てたり半分にしたことが出来ます。客観的に捉えることも出来るようになります。

自分の気持ちを語るころから、心の傷は癒えていきます。語ることからしか自分の癒しは始まらないのです。

2) 聴くことは、生きる権利を保障すること

自分を表現する、語るということは、即ち、生きるということです。ワクワクしたりドキドキしたりという心の動き、感情を誰かと共有すること、自分の気持ちに気づき、自分の方向性を見出すこと、傷つき壊れかけた自分を癒し、また起き上がる力を得ること、このようなことは、「生きる」ということに他なりません。

しかし、表現するためには（生きるためには）、それをしっかりと受け止める相手が必要です。話の聴き方によっては、逆に、子どもの苦しみや悲しみを二重にしてしまうことも有り得るのです。発せら

れた言葉が、捻じ曲げることなく、そのまま迎え入れられるという確信がないところでは、子どもは自分を本当に語ることをしないばかりか、聴く側の思いに沿って話をするこゝも、間々有ります。

チャイルドラインにおける「聴く」という行為は、電話をかけてきた子どもたちが、普段感じていることや思っていることを、安心して「話す」、「表現する」ことを約束しています。この安心感が担保される時、子どもは十分に自分を表現してきます。その時、子どもは生きていることを約束されます。即ち、「聴く」ということは「子どもの生きる権利を保障する」行為であると言つてよいのです。

また、このように考えると、「話す」ことと「聴く」ことは対の行為、もしくは同一の行為であると言えます。

3) 聴くことを保健医療の枠組みで考えてみる

「聴く≡話す」ということを、保健医療の枠組みに照らして考えてみると、予防や衛生教育という側面、一次医療や初期救急の側面、治療やリハビリの側面と言う、3つの側面で捉えることができます。

年少の子どもの話をきちんと聴くということは、自分の気持ちを言葉で表現することの練習と言えます。これは予防や衛生教育という、健康作りに置き換えて考えるとわかりやすいでしょう。

自分の気持ちを言葉で表現できれば、暴力などの行動に訴えなくて済みます。幼いころからきちんと話を聴いてくれる関係を持っていれば、表現の練習を重ねることができ、コミュニケーション能力も育つでしょう。よい人間関係が結べるようになり、キレルということも少なくなります。

「聴く」ことは心の健康教育の第一歩と言えます。

一次医療や初期救急という側面では、怪我をした時に救急処置が出来るということと同じように、心に何か傷を負った時に、誰かに話すことでその傷が治っていったり、ひどくならずすむということです。

辛いこと、いやなこと、悲しいことが起こった時に、先ずだれかに話すこと、じっくり聴いてもらう事で気持ちが落ち着きます。何かあったら安心して聴いてもらえる関係があるということは、問題が深刻化するのを防ぎます。

話すことができるということは、救急処置を知っているということになります。そして、聴いてくれる大人は、応急手当をする身近な大人であったり家庭医ということになります。

そして、この二つ、健康教育と一次医療がしっかりしていること、つまり、何かあれば誰かがちゃんと聴いてくれる、その安心感が子どもの自立を支えていくことになります。

虐待やいじめ、喪失などの、苦しみや悲しみの体験は、話すことによって過去のものにすることができます。その過程がどんなに辛いものか想像に硬くありません。そこに寄り添ってしっかり受け止める人がいて、初めて語る事が可能になります。自分を語ることで、じっくり聴いてもらうことで、傷が癒されていきます。体験を過去のものにできれば、それをコントロールし付き合っていくことができます。その過程は保健医療で言えば、治療・リハビリと言い換えることができます。

子どもは話すのは下手です。しかし、どんなに下手であっても、話すことは心のメンテナンスになり、聴くことは心の健康作りを支えるものです。

6. チャイルドラインのめざすもの

チャイルドラインが受ける電話が、年間10万件を超えるとは言ふものの、18歳までの子どもの数は2千万人を超えます。必要とする、全ての子どもの声に耳を傾けるには、まだまだ不十分です。

チャイルドラインは電話の中からみえてくる子どもの現状を元にして、豊かな地域社会を作っていくことをめざした活動ですが、そのために、チャイルドラインがこれまで以上に力をいれて、取り組まなければならない内容について、以下の3点にまとめました。

1) 子どもの声をしっかり受け止める

チャイルドラインが、先ずすべきことは、子どもの声をしっかり受け止めることです。

電話をかけてきた子どもの話を、真剣に聴き、一人一人に真摯に向き合うこと。それは、子どもの生きる権利を保障する行為です。そのことを、先ず、実践すること、そのような大人が、電話の向こうにいるのだということ、一人でも多くの子どもに実感してもらうこと、それが、すべての基本になるものです。

そして、そこに集まった子どもの声を、社会を変えていくための力とするには、どんな子どもでも、いつでも電話をかけられる体制を作ることが必要です。また、かけてきた子どもが、本当に安心して自分を語る事ができる、即ち、子どもの声を「聴く」ということに関わる、質の確保と向上が不可欠です。

この二つが担保されて、はじめて「子どもの声をしっかり受け止める」事ができるのだと思います。

2) 「聴く」ことのできる大人を増やそう

本来、子どもの話を聴くべきは、親であり教師、そして祖父母や地域の人々、そのような、子どもが日常の中で出会う大人こそが、本来の聴き手であるかもしれません。

しかし、1年間に10万件を越える電話がかかってくるという事実。これは子どもの周りに、子どもが安心して話ができる大人がいないことを、如実に表しています。

チャイルドラインは、子どもの話を聴くことのできる大人を少しでも増やしたいと思っています。

それには、実際に電話をうける受け手が増えることは、勿論ですが、受け手を経験した人が地域に戻っていくことによって、子どもの周りに聴くことの出来る大人が増えること、そして、一般向けの講座などをおして、聴くことの大切さを、少しでも多くの市民に伝えていくこと。そのことによって、子どもが暮らす地域に、チャイルドラインと子どもとの関係と同じような、対等な、そして暖かい関係が持てる大人が、増えることを願っています。

3) 子どもの声から社会を変える

現在の日本の子どもの現状は、色々な面で危機的であると言ってよいと思います。この状況を変えていくには、多くの分野での様々な取り組みが必要です。

チャイルドラインは、電話を受けることで、かけてきたその子どもが、そこに居場所を見出し、そこで勇気づけられ自立していく、そういう活動です。家庭や地域の養育機能の低下、教育の形骸化などが懸念される中で、チャイルドラインの必要性がさらに大きくなるのは必然です。しかし、電話をかけてきた、その子どもが元気になるというだけでは、子どもの現状が変わるわけではありません。

チャイルドラインの活動の目的は、子どもも大人も、その権利が守られ、安心して育ち合える社会を作ることです。そのために何が必要なのか。様々な対策を考える時、その問題の当事者の声を聴くという事は欠かせないことです。

すべての基本は「子どもの声」です。しかし、子どもは社会的に一番弱く、その声は小さく、社会になかなか届きません。

チャイルドラインで受けた子どもの声を地域社会に発信し、それを元に社会を変革していくことが、チャイルドラインの最大の目的です。

チャイルドラインが、どのように自治体や学校や地域とネットワークを作り、子どもの声を、子どもが育つための政策にどう反映させていくのか。他の様々な専門機関や子ども支援団体と、どう連携していくのか。日本で活動を開始して10年を経て、今、そのことが大きな課題となっています。

7. 終わりに

日本のチャイルドラインのあゆみと電話の概要、および、今後の課題について述べました。

2008年11月10日から2週間行われた全国キャンペーンでは、13,000件余りの電話がかかりました。しかし、実際にはこの数字のほぼ2倍の数の子どもが電話をかけており、かけた電話の約半分しか電話はつながりませんでした。

かかってきた、すべての電話がつながる体制を整備するためには、行政、企業、市民など多くの支援が必要です。

しかし、どれだけ体制が整備されても、それだけでチャイルドラインの活動は完結するものではありません。

子どもたちは大人や社会の様子をよく知っています。未来は決して明るくはない、不安を抱えているということを感じています。子どもたちが歩むその社会を、私たち大人がどれだけ明るく安心できるものにしていけるのか、問われているのは大人のあり方だと言えます。

すべての子どもが、安心して電話がかけられるように、その体制の整備と質の確保、そして、受け取った子どもの声を社会に発信し、社会を変えること、この二つを車の両輪として、チャイルドラインは、これからの活動を進めなければならないと思っています。

*文中の子どもの声は、プライバシーに配慮して、すべて著者が再構成したものです。

*チャイルドラインでは電話を受ける人のことを受け手と呼んでいます。

参 考

特定非営利活動法人チャイルドライン支援センター

<http://www.childline.or.jp/>

特定非営利活動法人めぐろチャイルドライン

<http://www.voluntary.jp/meguro-cl/>

チャイルドライン支援センター発行 チャイルドライン・ガイドライン2007

チャイルドライン支援センター発行 チャイルドライン年次報告（毎年発行）

中澤恵子「チャイルドラインにみる子どもの表現～言葉にならない声に耳を傾けて」：こども環境学研究 Vol. 4, No. 2, P27-30

中澤恵子「子どもの自立を考える～いま、聴くことの大切さ～」：こども未来2007.7, P10-12